

『赤い鳥』と『開明国語課本』に関する比較研究

——鈴木三重吉と葉聖陶の綴り方教育理論における「生活」の観点から——

鄭谷心

1. はじめに

本論は、日本の生活綴方教育史において重要な位置を占めた『赤い鳥』綴方と中国近代の「児童文学の父」と称された葉聖陶の『開明国語課本』(以下、『開明本』と略す)を、それぞれの綴り方教育理論における「生活」の観点から比較しながら、検討する。

子どもたちを実生活と向き合わせながら、子どもたちの「ありのまま」の表現や人間性を重視してきた生活綴方が日本の特有なものとして研究されてきた。特に、「赤い鳥」綴方は、表現としてのリアリズム方言と表現態度として「すなおに書く」「ありのままに書く」ことを、綴り方の公理のように教育者の胸に印象づけ、以後の綴り方・作文の基線をしいたという重大な意義をもつと評されている¹。実際のところ、中国の近代文壇や教育界において、それと似たようなリアリズムを重視する文芸教育の動きがあった。その代表的なものとして、中国近代教育家・文学家である葉聖陶の「作文は生活の飾り付けではなく、生活そのものだ」「人はだれでも誠実な、自分の話を書きたいものだ」という作文教育論がある。そこでいう「生活」の中身は一体どういうものなのか、同年代の「赤い鳥」における「生活」とは同じ意味なのか、またそのような「生活」は綴り方・作文教育においてどのような意義と課題をもたらしたのか、これらの問題意識を持ちながら、本論は鈴木三重吉と葉聖陶の、それぞれの代表的教材である『赤い鳥』と『開明本』を取り上げて、彼らの綴り方・作文教育理論に照らし合わせながら考察する。この考察によって、日本と中国の近代における綴り方・作文教育における類似点および相違点、またはこれからの綴り方教育における「生活」の意味付けに示唆を得ることができると考えている。

2. それぞれの「生活」の観点

(1) 『赤い鳥』における三重吉の「生活」観の変遷

「1918年7月、文壇作家鈴木三重吉(1882-1936)によって創刊された児童雑誌『赤い鳥』の出現は、日本の子どもの詩と文章を書く能力を拓く技の歴史にとって画期的な事件だった²と中内敏夫は評価している。三重吉の「小さい人の文章の標準を与えると共に、一面では会員のお方全体の大きな家族的の楽しを提供したい³」というような創刊宣言によると、そこで描きたいのは「中産階級の子どもの生活」であった。そして創刊意図は、芸術的価値の高い童話と童謡を創作し、子どもたちに、『赤い鳥』を「読み物」として、また「作文のお手本」として与えることにあった。この意図をもって「童話と童謡を創作する最初の文学的運動」を起こそうとした。この運動の賛同者及び執筆者は、主宰三重吉をはじめ、北原百秋、小川未明、有島武郎、芥川龍之介、菊池寛ら、文壇の錚々たる巨匠である。そのほかに、一般から募集した作文綴方、自由画、児童自由詩およびその書評を掲載する投稿欄がある。それまで、立川文庫などの廉価な大衆児童娯楽文学も出回ってはいたが、三重吉はそれを「俗悪」とし、白秋とともに、「童心至上主義」を抱えて子どもの純粹を守る上質の文学を提唱した⁴。

創刊当時、三重吉は自分の綴り方教育理念を次のように告示している。

すべて大人でも子供でも、みんなこういう風に、文章はあったこと感じたことを、不断使っているままのあたりまえの言葉を使って、ありのままに書くようにならなければ、少なくとも、そういく文章を一番よい文章として褒めるようにならな

ければ間違いです⁵。

このように、『赤い鳥』発行当初は、「生活」というキーワードはまだ使用されていなく、ただ「あったこと感じたことをありのままに」という実写的な表現態度が推奨されてきた。

ところが、2年後の1921年の2月号から、三重吉は方言交じりの綴方を掲載し、「生活」という言葉も意識的に用いるようになった。同年の6月号では、「村人の生活をよく表しています」と評価している。それと同時に、綴方欄のほとんどが、地方の方言交じりの綴方で占められるようになった。方言を取り上げた理由について、三重吉は『綴方読本』という「赤い鳥」教育の集大成といべき本において、次のように述べている。

方言は、国語の統整上廃棄するのがもとより当然である。ただしそれには標準語にない、便利な、または貴い、純正な言葉で、国語の上に生かす必要のあるものを、ふるいえらんで、取り入れるなぞの用意がある。(略) 地方によっては、低年の子どもは、文化の関係、つまりぐるりの人々の脱しきれない方言の因襲の中に浸かっているのと、標準語の読みものを多く読まない点とから、標準語の言葉なるものがひどく乏しい。それらの子どもに準標準語のみで綴方をかけということは、われわれに外国語で口を開けということと同じくたちまち表出に用えて、書くべきことも書けなくなってくる⁶。

このように、三重吉は地方の幼い子どもに馴染みのあることばを使わせることで、綴方にたいする抵抗感を緩和しようという「教育的側面」を重視している。それだけではなく、三重吉が指摘した「作品の到達標準」である「芸術的側面」と「参考的価値」も表している。ここでいう「芸術的側面」とは、地方で生活している子どもたちは、方言を使って表現することによって、作品にその地方独特の微妙なニュアンスと文化的雰囲気が付加されることを指す。一方、「参考的価値」というのは、日常生活の中で方言を用いている子どもたちに対しては、方言を使って表現するというこ

とが、その子の実態をもっとリアルに表現しうるため、その子の指導に役立つ参考になるということである。

また、『綴方読本』では、綴方教育に関する「生活」観や生活指導についても熱く語っている。例えば、「生活させる綴方の指導」の作品例と評語を挙げて、事象の冷静なる観察は、記述、叙写についての必要な根本的な態度だということに賛同するが、その態度を養成するのが生活指導そのものの一面だということに賛同しがたいというのである。このような「生活指導」の曖昧さやありふれている作品に彼の指摘に同感せざるを得ないが、三重吉自身が目指した生活指導の中身は明示されていないままであった。

また、前述したように、『赤い鳥』において中産階級の子どもの像から村人の生活像が登場するとともに、三重吉自身は「生活」「地方」「方言」という言葉をますます使うようになった。『赤い鳥』の創刊当初に三重吉は文章指導にそれほど重視していなかったものの、読者層の変化と要求に応じて文章表現や生活指導にも目を向けるようになったに違いない。つまり、同誌の読者層・投稿層ははじめの都市新中間層にはじまり、漸次的に地方農村社会、更に小学校担任教師の手を通して都市労働者層の一部にも及んでいった。また、そのような視点の変化には、関東大震災がきっかけとなったという説がある⁷。すなわち、大正12年の関東大震災以降、震災テロの発生、プロレタリア階級の勃興、社会革命への不安と畏れの中で、文学者たちは「社会階級」を意識せざるを得なくなったという状況にあった。同誌における「生活」は、都市新中間層の子どもたちから地方農村社会と都市労働者の子どもたちへ転向していく中で、三重吉の捉えた生活観と子ども観は変わったのか、それとも一貫してきたか、これについてのちに具体例と照らし合わせながら検討する。

(2) 『開明本』における葉の「生活」観

一方、同年代の中国では、辛亥革命後に新文化運動の気運が高まり、教育界では平民教育、職業教育、実用主義教育、教育測定・心理測定等の様々な教育改革運動が発生した。その最中、特にデューイらの訪中により、アメリカからのプラグマティズムの影響が広まった。西洋の理論と中国の伝統的な漢文学を吸収した

葉は、これまで子どもの現実と離れた硬直化した作文教育を生活化・科学化しようと考え、1924年に白話文運動の代表的な作文研究書である『作文論』を著した。同書においては、作文の態度である「誠を求める」と、作文の源流である「充実した生活」という前提を設定したうえで、作文の題材をいかに組み立てるかという方法論を紹介した。その中で、葉は表現と生活について次のように述べている。

自分のものを書こうとすれば、書いたものを美しいものにしようとする要求が続けて出てくる。もし表現したいことが、人間にかかわることであれば、その真偽を問わなければならないし、生活の実状にそったものでなければならない。もし感じたことを表現しようとするのであれば、内心につもりつまったものをもとに、表現するというのが自然である⁸。

つまり、唯美主義の立場に立ちながらも、誠を求める態度をもち、生活の実状に合ったものを感じたままに表現することが葉によって推奨されている。このような誠実な態度を重視する作文論は、三重吉が提唱した「ありのまま」という写実主義に似たようなものであるといえる。また、葉は文学者として、三重吉と同様に、作品に対する芸術的な追求も教育に表れている。次の例のように、葉は小学校の教材について述べている。

教育が教科書や授業形式にとらわれるべきではない。なぜなら、教科書はただ参考に備えるものだけであって、真の教材は教師が選択しなければならないのである。その教材は、児童生徒が触れ合ったことのある物事であり、児童生徒の感情をそそる表現方法でなければならない。つまり、教材選択のその普遍的な基準は、「文学的面白みに富んだ」ものであるように決めたい⁹。

つまり、「文学的面白みに富んだ」ものかどうかは教材選択の基準となり、その理由はやはり子どもの生活・心理にあったのである。すなわち、各地域の童話や物語、および歴史、地理、慣習と融合した「韻律の

ある唄、芝居」が教材として取り扱われるべきであり、子どもたちの生活の中で、興味のある事が容易に忘れられないため、彼らにその体験を語らせ、書かせると、最適な教材になるというのである。要するに、葉が捉えた国語教材とは、狭義の教科書に限らず、子どもの日常生活における言語や文字の「参考的価値」のあるものや「知的栄養」をもつあらゆるものであり、とりわけ文芸的な色彩が濃いという性格を持っている。

このような葉の教材論を最も具現化したものは葉の編著、大漫画家・豊子愷¹⁰の挿絵によって出版された『開明本』である。同書は、当時の初級小学校（1～4年生）の子どもを対象に作られた検定国語教科書であり、児童文学作品集でもあった。1980年の葉は自分の回想録において、「児童文学の面において、やり遂げた仕事があります。それは、1932年の一年を費やして編纂した『開明国語課本』¹¹であると述べている。また、『葉聖陶児童文学全集』に収録した『開明本』の中の児童作品は児童生活ストーリー13編、童話16編、散文22編、小説1編、児童詩と童謡17編、新劇5編、翻案物18編があり、合わせて92編に及んだ。同書は、文例として用いられる表現は素朴でストレートながら、生活に密着したシーンのひとつひとつを丁寧に生き生きと描いているため、中華民国時代に40余版を重ねたロングセラーとなった。また、2009年から上海科学技术出版社より再び出版されており、多くの人の関心を集め増刷される本も売り切れとなっている¹²。70年後も色彩を褪せない『開明本』は、今は多くの学校や家庭で子どもたちの副読本として愛用されている。この点において、『赤い鳥』という教師や子どもに愛読されていた児童文学雑誌と同じ意味を持っており、分析・比較の甲斐があると考えられる。そこで、まず本書の編集要旨から、その最も顕著な2点の特徴について検討したい。

第一に、「本書は児童生活を中心に編成した。材料は児童の周囲から始まり、児童の生活を展開するにつれ、次第に広大な社会生活までに広げる。内容は社会、自然、芸術などの教科と充分な関連があると同時に、材料そのものが文学的である」¹³とされている。

1923年に公布された「新学制中(小)学(校)課程綱要」により初級小学校カリキュラムにおいて修身科が廃止され、社会科をはじめ、多くの新しい教科¹⁴が設置さ

れた。葉はこの教科書を、新しい教科を含んで各教科との関連性を持たせると同時に、文芸性を活かして児童の家庭生活・学校生活から社会生活まで拡大していく、つまり同心円の拡大の原理に基づいて編成したのである。

実際に教科書を検討すると、その内容は児童の生活場面や授業場面および当時の人文・地域社会の情景にとどまらず、『商の時代の本』のような歴史知識から『イソップ寓言』『ムーン』などの外国文学まで、さらに『望遠鏡と顕微鏡』『電報』のような科学知識にも及んでいる。このような多岐にわたる内容のなかで、児童に知識そのものを習得させるよりも、多様な文章表現に親しみを抱かせるとともに、読み書きの基礎を身につけさせようという国語教育の目的があったと葉は50年後に語っている¹⁵。それだけではなく、教師や年長者への挨拶の場面や、接客の対話及び友人との付き合いの過程が教育内容に含まれるように、日常生活や社会生活を円滑に営むためのコミュニケーション能力や人間関係形成力を児童たちに身につけさせようとする目標¹⁶も映し出されている。なお、その文例は生活のあらゆる面に広範囲に亘るが、生活の断片や表面しか止まらず、学問の系列として構成されにくい限界を持っているといえる。

第二に、方言を教科書に取り上げたことが斬新である。つまり、地方の低学年の子どもたちの生活に浸透している方言を架け橋として、子どものそのままの言葉を通して学習への興味・関心を高めていくことが葉の狙いである。たとえば、第13課の「明天会（また明日）」という表現では、「会」の言葉使いは中国の浙江・江蘇省の方言であり、標準語¹⁷の場合は「見」が使われる。しかしここでは地方の児童に親しみやすい言語として「会」が教科書の中に用いられている。

ここでは、教科書編成について、方言は、国語の統一上で廃棄すべきかどうか、教科書に用いられるべきかどうかという議論に至らず、単に当時の白話文運動の中で葉の方言交じりの対話を教科書に取り上げた意義について述べたい。当時の白話文運動は、日本の言文一致運動と同じように、話し言葉と文章言葉の不一致に対抗し、自分の日ごろ使っている言葉をそのまま書こうとする国語改革運動だった。方言はもちろん、日ごろ子どもたちに使われている言葉であり、子ども

の生活や文化的環境そのものを表している。葉は方言について明確に論じた文章は存在していなく、低学年の子どもたちに方言交じりの文章を書かせたかどうかの記録も残されていない。しかしながら、教科書・読本における方言を通して、子どもたちに自分たちの生活・環境・文化を親しませながら学ばせようという意図は窺えたといえる。つまり、同書は子どもの興味・心理および彼らを取り巻く生活と社会文化を考慮した総合的な学習材になり、子どもたちに物事に学ぶ精神を培う意義を持っている。そこで、具体的には、どのような生活シーン、またどのような子ども像が描かれているのか、のちに具体的な文例を通じて検討する。

3. 作品例や教材例

(1) 『赤い鳥』の作品例

①初期の写実主義・童心主義を表す作品

創刊当初の第一巻第一号では、三重吉は、綴方投稿欄の選評において、「すべての大人でも子供でも、みんなこういう風に、文章は、あったことと感じたことを、不断使って、ありのままに書くように」すれば間違いないと強調した。また、第一巻第二号では、「何でも構わず自由に書いてご覧なさい」と呼びかけて、推薦作文の一つとして次のようなものを載せた。

日記（賞） 本所縁小学校尋常五年生 原菊枝
おふろへはいつてから、おとなりのえんだいにこしかけて、空をみていると空がうごいているようでした。

その時ふいに、花ちゃんの家で、おおぜいで笑いこえがしましたから、行ってみると、お話をしていました。私もいれてもらいました。

（大正7(1918)年『赤い鳥』7月号、第一巻第二号、pp. 74-76）

このように、お風呂の時の様子と隣の笑い声や会話への参加というような日常のささやかな出来事が雑誌に推奨されている。当時、三重吉はあくまでも自由かつ写実的な表現の指導しか追求していなかったのである。『赤い鳥』綴方の最初の姿は、形式主義的な作文へ抵抗を含みながらも、「日常」を描くということを重視する明治時代における言文一致運動の延長線上に立った

だけである。それは、生活綴方運動の源流である随意選題論を編み出した芦田恵之助の人間教師という立場と異なって、「童心主義」から出発した児童文学者の立場であったといえる。

②村の生活を表す作品

大正10年から、村の子どもたちが家族とともに労働するシーンを描く当選文が増えてきた。そのひとつは次のようである。

炭取り 福井県大飯郡高濱小学校高一年
西本義秀

今年は家から三松学校へ炭を入れて居られる。丁度今日炭がなくなったので学校から是非入れてくれと頼みにおいでた昼から天気もよいからひき受けて、父と母と三人で神野の山へ行った。(中略)段々上へ行くほど雪がある。来る道には少しもなかったのに山にはたくさんある。炭がまのあたりへ行くと二尺余りもある。雪が無くても運びかねる五貫俵の炭であるから僕は運ぶのをやめた。父等は雪をぐざぐざふみ込んで炭がまの所へ行かれた。炭がまはそこにある。父と母は二人とも二俵ずつ負って、また雪の中をぐざぐざ出た。父はさっさとおいでたが母は足が埋まって後へも先へも行けぬので、雪の上に炭を下ろして置いてまた炭がまの所へ行って、むしろを取って来られた。(中略)難波江から僕も曳き手をつけてひっぱった。家へ帰つたら三時だった。父と母とは学校へ炭を持って行かれた。

(大正10(1921)年『赤い鳥』6月号,第六卷第六号,pp.87-88)

これに対する三重吉の評は、「西本君の「炭取り」も、お父さんやお母さんといっしょに、雪の中で働く、楽しい労働を愉快に思いました」となっている。

先行研究においては、山下夏実は三重吉の評を「楽天的」であり、「生活」というものを「社会全般の大きなシステム」の中で捉えたのではなく、「一個人が直接対面する諸事象」というレベルで捉えたと指摘した¹⁸。つまり、三重吉は村の生活を描く作品を推奨しながらも、社会システムの中における階級差別の現実に目を逸らし、ただ綴方における自己満足という面に目を向

けたということである。

しかしながら、『綴方読本』において、三重吉は「綴方の到達標準」である「芸術的価値」を、「児童の通例な日常生活上の事象」を「実感的にかいた価値」と設定している¹⁹ため、この「楽しい労働」を実写した作品もその芸術的な価値に当たる。ゆえに、三重吉は「芸術水準を高めよう」という使命感を持って創刊した『赤い鳥』において、あえて社会差別の問題に解決の糸口を見つける必要がなかったといえる。

また、大正12(1923)年の関東大震災で同誌が大打撃を受けた後は、販売部数が急減し、休刊・再刊を経て、結局、昭和11(1936)年、三重吉の死の直後に完全廃刊となった。そのため、短命ではありながら、後世に大きな影響を与えた『赤い鳥』においては、三重吉の実写主義的な文章観、純粋的な子ども観、及び芸術的な価値を置いた生活観が終始一貫していた。

(2)『開明本』の文例

①会話による文例

『課本』においては、手書きの言葉や文章がバランスよく挿絵の中に入れてられている。またそのワードや文章が絵と互いに引き立てあって趣のある手法が用いられ、児童生徒の学習への興味を喚起させている。例えば、一年生後期の第36～38課に家庭生活について次のようなシーンが描かれている。



第36課

「お母さん、服を縫って誰に着させるの？」

「服を縫ってきれい好きな子に着させるのよ。」

「僕はきれい好きだよ。体も、頭と手足も清潔だ。」

その子は僕だよね？」

「そうよ。」

第37課

「お母さんは僕のために服を縫ってくれるから、僕は代わりにお母さんに物語を聞かせてあげる。」
「どこで聴いた物語なの？」
「今日、先生から聞いたんだ。」
「なんていうタイトル？」
「橋を渡る十匹の豚だよ。」

第38課

「十匹の豚が橋を渡っている。母豚が前で、子豚が後ろについていく。母豚は橋を渡った後、振り返って子豚を数えた。『一、二、三、四、五、六、七、八、九。私たちは十匹のはずなのに、どうして一匹少ないの？』」

(1934年『開明本』第3冊,第36～38課)

このように各授業はそれぞれ独立しつつも、ストーリーとしてつながっている。普通の家庭生活における対話だが、読むと親子の互いに対する愛情を感じさせつつ、面白みも味わえる。第36課では、きれい好きな子が母親に愛されるシーンを通して、子どもの主体性を引き立てる家庭教育のあり方を示している。第37課は、幼い子どもでも、お礼をすることができるという優しい心持を表現している。第38課の物語はクライマックスであり、算数ができない母豚の描写を通して、子どもたちに論理的な思考を促す効果をもっているといえる。このような児童心理に適応した面白みを追求する、知的好奇心をかき立てる教育内容は、葉の作家としての文芸志向によるものであり、教育者が持つ純真爛漫で、好奇心旺盛な子ども像にもよるものであると考えられる。葉は、まさにこのような教材を通して子どもの日常生活において「参考的な価値」と「知的栄養」を提供しようとしている。

②日記の文例

小学校4年生用の『開明本』における日記の文例が次のようなものとして載せられている。

日記 十二月二十四日

今朝、目覚めたら、部屋の中で異様に明るかったです。「もしかして雪が降った!」と思って、慌てて起きて窓際へのぞきにいったら、地面に雪が厚く積もっていて、屋根の上にも雪が厚く積もっています。

軒下に、一羽の雀がぼかんとしています。その小さな頭には何を考えているのでしょうか。

学校へ行く途中、ずっと雪の上を踏んでいきました。ギュッギュッという感じが面白かったです。授業中、先生は私たちに雪花を観察させました。小さな雪の結晶は、すべて六角形となっていますが、模様がまたそれぞれ違いました。授業の休憩中、私たちは雪合戦をしました。みんなは雪を固めて投げ合って、雪玉が体に当たった方が負けでした。

放課後、家に帰ったら、父の手紙が届きました。手紙に、今月末に父が戻ってくることが書かれていて、私と母と姉はみんなとても嬉しかったです。

今日の午前中は二十六度で、午後は二十八度でした。

(1934年『開明本』第7冊,第149課)

この日記はまさに子どもの朝から晩までの一日を実写したものであり、「観察」は重要なポイントであるといえる。雪の光と積もり具合、雀のぼかんとした様子、雪花の描写と雪合戦の紹介など、どれもありのままに簡潔に書かれている。特に最後の気温の記録は現在の日記に取り入れることが意味深い。なぜなら、普通の日記は、温度のことをそれほど重視していないが、自然や天候観察の場合に限って調べるものもあると考えられる。ここで、温度目盛りが華氏温度を採用しているのは、おそらく欧米からの測定運動の影響であろう。なお、この日記を採用した理由について葉は述べていないが、教科書に載せられること自体が、子どもの冬の一日の生活を忠実に表しているこの作品への評価に値する。そこには、また好奇心あふれる純真な子ども像があった。

③村の生活の児童詩

学年が上がるにつれ、児童が村の労働に参加する場面を描く文例が増えるようになっていく。次の児童詩はその一例である。

綿花採り

綿花の田んぼから綿花を採って帰った。
綿が雪のたまりのように積もった。
綿を打つと、パンパンパン。

スライバーを揉むと、細長くなった。
昼間は綿を紡いでは終わらなく、
夜に灯火をつけてまた紡いだ。
織機を稼働させ、
布を織った。
綿と布そろって、家族全員の綿入れ服を縫おう。
(1934年『開明本』第7冊、第140課)

日本語に訳してしまうと、中国語のリズムを届けられないのが、村の人が楽しく労働している姿が目の前に浮かぶように描かれている。綿を採ってから服になるまでの作業と労働が大変だが、最後に家族全員の綿入れ服ができるという嬉しい結果が待っているのである。子どもたちが労働を通し、自給自足ができる自慢さえ感じさせられる児童詩であった。これは、当時の郷土教育において、社会システムの中での階級差別を意識させずに、農家の生活と労働を謳歌する教材である。前に列挙した「炭取り」という作品における「生活」と比べると、農家の大変さよりも労働の楽しさがいっそう鮮明に伝わってくる。当時、中国から多く人が日本に渡り、東洋美術・文学などを勉強してきたから、葉の教師仲間である夏巧尊もその一人であった。ゆえに当時日本に流行っている写生主義も中国の文学界と教育界になんらかの影響を与えたと考えられる。また、葉は日常生活を記録する文芸的表現・参考的な価値をもつ教材を重視しているものの、文章指導においては子どもの欲求を掻き立て、子どもの生活を充実させる文章表現の技術を重視した²⁰。さらに当時の中国の学校において、生活指導を担う訓育教師が特別に設定されているため、葉は子どもの生活指導全般のための作文教育というレベルまでに至らずに、『開明本』のような文学・芸術と生活を結合させる国語教育のレベルに留まったのである。

4. おわりに

本論は、日本の生活綴方教育史において重要な位置を占めた『赤い鳥』と中国近代の「児童文学の父」と称された葉聖陶の『開明本』における子ども像と生活像を、三重吉と葉のそれぞれの教育理論における「生

活」の観点に照らし合わせながら、検討してきた。

中内は、夏目漱石は1911年の講演において、「日本の開化」は「外発的」と規定し、それに抵抗した芦田の随意選題綴方は「内発的」東洋自然主義であるのに対して、漱石の門下生である三重吉は基本的に「外発的」な日本認識を引き継ぐと指摘している。そのため、『赤い鳥』における外国から翻訳・翻案された童話が多い。しかし、それと推薦された子どもたちの作品におけるリアリズムと衝突することなく共存している。一方、中国は日本より著しく西洋からの圧力を受けて「文明開化」になったゆえに、葉の「外発的」理論の部分が多い。それに対して『開明本』において外国の童話よりも子どもたちの生活を表す創作が圧倒的に多い。いわゆる、日中ともに西洋的なものを自国の子どもたちの実態に適応させようと試してきたのである。つまり、『赤い鳥』は児童文学雑誌として、子ども向けの投稿欄と通信欄によって教育的意義をもつものに対して、『開明本』は国語教科書として、児童文学作品集という芸術的な価値を持っている。具体的には、両者が持つ類似の意義と特徴は次のようにまとめられる。第一に、低学年の子どもに対して、方言を教材あるいは綴方に取り上げたこと。つまり、両者ともに話し言葉と文章言葉の一致という近代的言語改革の基礎を固めたことに貢献した。第二に、生活や知識における「参考的価値」を重視するため、取材は広い範囲にわたるものである。第三に、「ありのまま」の文芸性を教材選択あるいは入選作品の基準とする。第四に、童心主義的な思想によって子どもの純粋を守り、生活指導というよりも実写という表現レベルの指導に留まっている。

なお、あえて相違点をいうと日本では、後ほど小砂丘忠義による「綴方生活」の創刊、北日本教育連盟による北方性綴方教育論を経て、綴方は「生活的知性-イデオロギーを実践するために、新しい生活技術をもたなければならない」として、「全面的な生活指導」を視野に入れることになった。しかし、中国における作文教育の流れがまた技術・系統的な方向に転向し、葉の『開明本』における生活の観点はその時代における断片的な理論のように見えてくる。これからの課題として、『赤い鳥』以降の生活綴方の成立と変遷を視座に入れつつ、中国近代における作文教育の諸理論における

「生活」観と文章観を考察することで、現代作文教育への示唆として総括したい。

注

¹ 滑川道夫『作文教育』牧書店、1961年、pp.246-247。

² 中内敏夫『綴ると解くの弁証法—「赤い鳥」綴方から「綴方読本」を経て—』溪水社、2012年、p.3。

³ 雑誌『赤い鳥——鈴木三重吉追悼号——』第一二巻第三号、1936年、pp.290-291。

⁴ 河原和枝『子ども観の近代—「赤い鳥」と「童心」の思想』中公新書、1998年、pp.142-149。

⁵ 大正7(1918)年『赤い鳥』第一巻第四号、p.76。

⁶ 鈴木三重吉『綴方読本』新潮文庫、1935年、pp.526-527。

⁷ 中村光夫、『明治・大正・昭和』岩波書店、同時代ライブラリー、1996年。

⁸ 叶圣陶《作文论》商务印书馆、1924年、p.358。

⁹ 叶圣陶「小学国文教授的诸问题(小学校国語教育の諸問題)」《新潮》第3号、商务印书馆、1922年、p.11。

¹⁰ 豊子愷(1898-1975)現代中国の漫画家、翻訳家。浙江省崇徳県(桐郷)出身。1921年日本に留学し、絵画および音楽を学び、英語を独学、20年代始めから、とぼけたなかに生活の匂いを感じさせる独特の風格の漫画を発表しはじめ、たちまち有名になった。竹久夢二の影響をうかがえるその仕事は、漫画やエッセイのほか、英、露、日3カ国語からの大量の翻訳があるが、その中には『源氏物語』の全訳(60年代)がある。(加藤周一『世界大百科事典 第2版』平凡社、2006年)

¹¹ 叶圣陶『我和儿童文学(私と児童文学)』少年儿童出版社、1980年、p.64。

¹² 「1930年代の国語教材がブームに 特集」中国新聞社、2010年12月16日

<http://www.insightchina.jp/newsens/zt/1/>

¹³ 叶圣陶編著《開明国語課本》開明書店、1932年、p.6。

¹⁴ 1923年の新学制に基づいた小学・初等中学・高等中学の『新学制課程綱要総説明』によると、「小学の課程は国語、算術、衛生、公民、歴史、地理、自然(理科)、園芸、工用芸術、形象芸術、音楽、体育の12科目に分かれる。但し、初等小学校の4年では、衛生・公民・歴史・地理の4科目を総合して社会科、自然と園芸を合併して自然科とする」。また初級中学課程は社会科、言語文学科、算学科、自然科、芸術科、体育科の六科に分かれる。(課程教材研究所編『20世紀中国小学課程標準・教

学大綱編：課程(教学)計画巻』北京人民教育出版社、2001年、p.107)

¹⁵ 叶圣陶編著《開明国語課本》序文、上海科学技術文献出版社2010年、p.2。

¹⁶ 叶圣陶「说话训练(話す訓練)」《教育杂志》第39巻、1924年、pp.23-25。

¹⁷ 民国時期に、北京語を基礎に中国標準語の規範が作られた。

¹⁸ 山下夏実「綴方運動における二つの生活—『赤い鳥』にみる「方言」導入と「生活」の発見—」「人間・エイジング・社会」2001年、pp.168-169。

¹⁹ 鈴木三重吉、前掲書、新潮文庫、p.79。

²⁰ 鄭谷心「葉聖陶の国語教育葉聖陶の国語教育改革論に関する一考察—国民政府成立期に焦点をあてて—」(京都大学教育学研究科2012年度修士論文)

(修士課程)